**2013年 談話会**

テーマ：「訳すということの多面性」

日時：7月20日（土）15時～18時

会場：明治学院大学 白金校舎 本館3階 1359教室

パネリスト：

・三浦信孝（中央大学、サイマルアカデミー）

・斎藤かぐみ（前ル・モンド・ディプロマティーク日本語版代表、東京大学非常勤）

・加藤久佳（慶應義塾大学研究員）

発表要旨：

**通訳者に必要な能力は何か：通訳と翻訳、同時通訳と逐次通訳、日→仏と仏→日**

三浦信孝（中央大学、サイマルアカデミー）

フランスには1957年に設立されたEcole Supérieure d’Interprètes et de Traducteurs (ESIT) という専門的な通訳者・翻訳者養成学校がある。パリ第3大学付属の大学院コースで、元NATO本部のあったDauphine校舎の一角を占めている。２年コースで入学も卒業もむずかしく、卒業すれば即プロの通訳者としてデビューできる。ところが、日本にはこれに匹敵する通訳者・翻訳者養成コースが大学にはなく、わずかに大手通訳翻訳エージェントが通訳者・翻訳者養成学校を経営しているにすぎない。

　私自身は1970年代パリ留学時代に見よう見まねで通訳を始め、フランス社会の多様な現実を知るいい勉強になったが、帰国後は大学でフランス語を教えるかたわら、東京日仏学院で三保元先生の跡を継いで通訳コースを担当し、1990年秋から日仏学院は福崎裕子さんにバトンタッチし、サイマルアカデミーでフランス語の通訳翻訳コースを細々と続けてきた。通訳を教えるには現場の経験が必要で、日仏会館などで学術講演の通訳を最近まで担当し、そこから文学だけでなく人文社会科学一般へと関心が広がった。

　本報告では、①通訳とはどういうプロセスか、②通訳interprétationと翻訳traduction はどこが違うか、③逐次通訳traduction consécutiveと同時通訳traduction simultanéeはどこが違うか、④言語的知識connaissances linguistiquesとテーマに関する知識connaissances thématiques、⑤記憶の二類型deux types de mémoire、⑥ノートテイキング、リピートとシャドウイング、⑦日→仏と仏→日とどちらがむずかしいか、⑧通訳者養成法は外国語教育に活かせるか、⑨日本のフランス語通訳市場、⑩多言語の国際会議のブース編成などについて概観する。

　結論はいたって平凡で、通訳のパフォーマンスは何パーセント訳せたかと数量化できるものではなく、言葉数は少なくとも、話者のメッセージをどれだけ正しく理解し的確に伝えられたかという質の問題に帰着する。言葉を換えていえば、ひとつのスピーチを通訳したあとで、メッセージのポイントが何だったかをまとめて言えない通訳者は何も通訳していなかったことになる。ワードツーワードの置き換えではなく、単語よりフレーズ単位、フレーズよりもパラグラフ単位でエッセンシャルなメッセージをつかむ論理的な理解能力が求められる。もうひとつ大事なことは、知らないことは理解できない、理解できないことは通訳できない。したがって通訳するためには、語られている事柄について十分な基礎知識、背景知識をもっている必要がある。私がESITを志願する学生によく勧めたのはパリ政治学院の外国人用１年コースである。

**共訳の現場を振り返って**

斎藤かぐみ（前ル・モンド・ディプロマティーク日本語版代表、東京大学非常勤）

『ル・モンド・ディプロマティーク』は日刊紙『ル・モンド』の系列紙として1954年に創刊された。内容的には時事的な論文、あるいは評論的な報道記事が掲載され、ボリュームは雑誌１冊分ぐらいになる。テーマも書き手も多分野かつ多国籍なのが特徴。欧州周辺・南米を中心に諸国(語)版があり、1998年創刊の日本語・電子版もその一つ。当初は発表者が個人事業として立ち上げようとしたが、次第に人が集まって、共同で作業する態勢が整っていった。2011年までの間にのべ50人前後が関与、毎月10人ほどで数本を和訳していた。訳者として初稿を作成する人に加え、２人が編集に当たる。後者のうち少なくとも１人は「底本」との照合も行う。「底本」は仏語版の紙面とし、著者のオリジナル原稿が例えば英語の場合も、オリジナル原稿や英語版掲載記事は参考にとどめた。おおまかに言って初稿に２週間、残り２週間で編集、とスケジュールは非常にあわただしい。メンバーのバック・グラウンドは多彩で、研究者や院生、在外者はじめ仏語圏と関わりのある人だけでなく、学生時代に習得した仏語を活用できずにいる人、さらには仏語を独学した人、また仏語はできないがプロジェクトに賛同するという人もいた。編集作業に当たっては、要は原文の読解力と日本語の構築力に対応することだが、一方では誤訳の洗い出し、他方では日本語としての読みやすさを示唆した。こうした共同翻訳・編集作業の実例からいくつか、気付いたこと・気付かされたことを挙げる。総じて言えることの一つは、原文との対応についても、日本語の表現や語彙の選択についても、許容範囲にかなりの個人差があるということ。また、無限の時間をかけられない限りは（さらにコストの問題が生じる場合は）客観的誤訳をゼロにするのは難しいということも言える。

**文学とその翻訳における「視点」考察**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　加藤久佳（慶應義塾大学研究員）

本発表の目的は、文学における「視点」がその翻訳でどう変容するかを検証し、変容する場合の要因を探ることである。

最初に「視点」について再考する。従来の「視点」議論は、英語の「三人称物語」に関するものが大半であり、「視点」を持つ人物と「語り」をおこなう人物とが混同されていた。

そこで、本発表では、「見る」行為と「語る」行為とを峻別する。「見る」行為をおこなう人物を「ヴューアー」( “VIEWER”)、 その基点を「見る基点」(“VIEW POINT = V-P)”、「語る」行為をおこなう人物を「ナレーター」(“NARRATOR”) 、その基点を「語る基点」(“NARRATIVE POINT = N-P)” と呼ぶ。そして、ヴューアーとナレーターの立ち位置と、互いの関係性とから、 V-P / N-P の類型を導き出す。理論上、7 類型が存在することになる。

対象テクストは、仏文学 *Le Petit Prince* と、その英訳 3 点、邦訳 3 点である。V-P / N-P の類型の指標として、[非] 人称 [代] 名詞、時制、話法を設定する。特定動詞についても言及する。対象テクストを電子データ化し、指標に関する検索プログラムを作成する。

原典を V-P / N-P の観点から 5 部構成として捉え、詳細な分析を施す。V-P / N-P の類型を整理する。

　分析の結果、理論上存在する N-P / V-P の 7 類型のうち 6 類型が仏語、英訳、邦訳に現れた。従来、仏語や英語には現れないとされてきたパターンも現れ得た。

V-P / N-P の変容の要因として、言語の特質が挙げられる。仏語・英語と日本語との間の差異は、既存理論で指摘されていたほど大きくない。筆者による類型によれば、この結果は想定されたものである。言語の特質の傾向としては、仏語と英訳の類型は相違が少なく、仏語・英訳と邦訳とでは相違点が比較的多い。仏語と英訳では、ナレーターが V-P と N-P を担うパターンが多く、邦訳では、ナレーターが N-P を、物語世界内に移動したナレーターが V-P を担うケースが多く見られる。邦訳では 1 文中に複数の類型が現れるという特徴も見られる。

変容の要因としては、翻訳者の特徴も挙げられる。原典における類型と比較すると、英訳者 3 名では、Woods、Howard、Cuffe の順に、邦訳者 3 名では、池澤、河野、内藤の順に差異が大きい。言い換えるなら、原作者と英訳者3名、邦訳者3名は、ある程度の言語的制約を受けながら、固有な類型の分布を見せている。

なお、現れなかった 1類型は、定義上、三人称物語に現れ得るものであり、V-P / N-P が語りのタイプの影響を受けることを示唆している。

翻訳の試みは、多様な要素 (原典か翻訳か、時代性など) を引き受ける。の移送と、の面での逐語性は、相容れない場合もある。原作と翻訳の間で無限の対話が続けられ、あらたな書き方へと開かれる。その意味では、近年の翻訳論者が主張するように、ある種の創作と言えるかもしれない。

翻訳研究としての「視点」研究は、言語間の「揺れ」 (“grooves of expression”) の要因を検証するために有効である。翻訳とは何かという問いに、一案を提供する可能性を有している。